原著

葛根の研究(Ⅰ)

——採集時期に関する史的考察¹⁾——松村 光重¹⁾ 御影 雅幸²⁾Studies of Chinese Crude Drug “Ge-gen”(1)
Herbological Study of Collection SeasonMitsue MATSUMURA¹⁾ Masayuki MIKAGE²⁾

- 1) Ph. M., Herbal Garden, Faculty of Pharmaceutical Sciences, Kanazawa University, 13-1 Takara-machi, Kanazawa, Ishikawa 920-0934, Japan
- 2) Ph. D., Herbal Garden, Faculty of Pharmaceutical Sciences, Kanazawa University, 13-1 Takara-machi, Kanazawa, Ishikawa 920-0934, Japan

Abstract Ge-gen, a Chinese crude drug derived from the root of *Pueraria lobata* Ohwi of the family Leguminosae, is collected in the winter nowadays both in China and in Japan. However, in the old descriptions of materia medica written in ancient China, it was said that the proper collection season was May or in the early summer on Chinese calendar. Present herbological study resulted that the collection season had been changed in the Yuan or Ming dynasty in China, mainly because of the confusion with eating Ge-gen, which was collected in the winter. The Ge-gen collected in the early summer should be dispensed in the prescriptions written in the old medical books such as Shang-han-lun and Jin-kui-yao-lue.

Key words : Ge-gen, kakkon, Puerariae radix, herbological study, collection season, Chinese herbal medicine

Nihon Toyo Igaku Zasshi (Japanese Journal of Oriental Medicine), 52(4・5), 493-499, 2002

(Accepted ; 11 Jun., 2001)

緒言

漢薬「葛根」は、『中華人民共和国薬典』²⁾ (1995)において、マメ科のクズ(野葛) *Pueraria lobata* (Willd.) Ohwi 及び甘葛藤(粉葛) *P. thomsonii* Benth. の根が規定され、我が国では前者が自生し、利用されている³⁾。中国にはその他、

食用葛藤 *P. edulis* Pamp. をはじめ数種の *Pueraria* 属植物が自生しており、地域的に薬用に供されている⁴⁾。

葛根の採集時期に関しては『名医別録』⁵⁾に「五月採根」と初見され、以後、宋、明代にいたる多数の本草書に「五月」或いは「五月五日」の記載が見られる。しかし、現代中国や日本では葛根は

1), 2) 薬, 金沢大学薬学部附属薬用植物園, 石川, 〒920-0934 金沢市宝町13-1

[2001年6月11日受理]

表1 葛根および葛粉に関する中国本草書の記載内容

書名	時代	葛根の採集時期	葛根の性味	葛粉の採集時期	葛粉の性味
神農本草経 ¹¹⁾	漢		甘・平		
名医別録 ⁵⁾	漢	五月採根	生根汁：大寒		
本草経集注 ⁵⁾	梁-500頃	五月五日日中時取葛根			
開宝本草 ¹³⁾	宋				甘・大寒
図経本草 ¹³⁾	宋-1061	五月五日午時採根			
本草衍義 ⁹⁾	宋-1116			冬月取生葛	
珍珠囊 ¹²⁾	元		味甘・平，性寒		
薬性賦 ¹²⁾	元		寒・療肌解表干葛先而柴胡次之		
薬類法象 ³¹⁾	元		氣平，味甘		
用薬心法 ³²⁾	元		甘・平・温		
湯液本草 ³³⁾	元-1246?		氣平，味甘(東垣云：甘・平・温)		
救荒本草 ³⁴⁾	明-1406		味甘，性平		
本草品彙精要 ¹⁰⁾	明-1505	五月五日午時取根	味甘，性平緩	冬月取根	味甘，性大寒
本草蒙筌 ⁶⁾	明-1565	秋後採根	味甘，氣平，寒	秋後採根	甘・冷
本草綱目 ¹⁸⁾	明-1596	(別録曰：五月採根) (頌曰：五月五日午時採根)	甘・辛・平	(宗奭曰：冬月)	(別録曰：生根汁大寒)
本草原始 ²³⁾	明-1595?	五月五日午時採取	(好古曰：氣平味甘)		
農政全書 ²⁴⁾	明-1639	端陽日採			
本草乘雅半偈 ²⁵⁾	明-1647	五月五日採根	甘・辛・平		
滇南本草 ³⁵⁾	明		味甘，性微寒		
本草擇要綱目 ³⁶⁾	清		甘・辛・平(寒性藥品)		
本草備考 ³⁷⁾	清-1682		辛・甘，性平		
本草詩箋 ³⁸⁾	清		甘・平		
本草從新 ³⁹⁾	清-1757		辛・甘，性平		
得配本草 ⁴⁰⁾	清		甘・辛・涼		
中藥志 ⁸⁾	1979	10月から翌年の4月前後採根			
中華人民共和國 藥典 ²⁾	1995	秋，冬二季採掘	甘・辛・涼		

冬期に採集されており、いつしか葛根の採集時期が変化している。

生薬の採集時期の重要性については古くから諸書に説かれており、孫思邈は「時によらずして採取したものは朽木に異ならず、虚しく人力を費すのみで裨益はない」と述べている⁶⁾。また、陰陽説を考慮すると採集時期は生薬の性味に影響を与えると判断され、葛根においては古来「甘平」とされてきたものが現在は「甘辛涼」とされ、性味の変化も認められる。性味は薬効と密接に関係しており、したがって、採集時期の変化は葛根の本来の薬効に大きく影響するものと考えられるが、

これまでに葛根の採集時期に関する本草学的な考察はなされていない。

そこで、本研究では、葛根の採集時期や性味の変遷について史的考察を行なった。

1. 採集時期の変遷について

葛根の採集時期に関する記載が初見される本草書は、『名医別録』⁵⁾で、「五月採根」とある。以後、明代に至るまで、葛根の採集時期は「五月」、あるいは「五月五日日中」との記載が見られる(表1)。すなわち、漢代には葛根は初夏に採集されていたと判断できる。

表2 日本の本草書における葛根及び葛粉の採集時期の記載 (江戸時代)

書名	時代	葛根の採集時期	葛粉 (食用葛根) の採集時期
新編靈宝薬性能毒 ²⁶⁾	1669	五月ニ根ヲ採リ…	
庖厨備用倭名本草 ²¹⁾	1671		宗奭曰：冬月ニ生葛ヲトリ… 二三月ニ葛根ノ土ニ深ク入テ大ナルヲトリ…
図解本草 ²⁷⁾	1685	頌曰：五月五日ノ午ノ時ニ根ヲ採テ…	冬月ニ生葛ヲ取テ… (本草衍義からの引用)
本朝食鑑 ²⁸⁾	1697		秋の末・初冬に生葛の根を採って…
菜譜 ²⁹⁾	1704		冬春掘り起こして…
大和本草 ²⁰⁾	1709	根ヲ冬月或春未生苗時ホリテ…	冬月曝乾ス
和漢三才図会 ³⁰⁾	1713		春月根ヲ取…
古方薬品考 ²⁰⁾	1842	冬ノ月根ヲ採リ…	冬ノ月其根粉多キ者ヲ択ヒ採テ…

表3 葛根の性「寒」の薬理に関する記載 (抜粋)

書名	時代	記載内容
本草彙言 ¹⁴⁾	明-1624?	…口燥煩渴，仍頭痛發熱者，必用葛根之甘寒，清肌退熱可也，否則舍葛根而用辛温（如麻，桂，蘇，防之類），不惟疏表過甚，而元氣虛，必致多汗亡陽矣
本草正 ¹⁵⁾	明	葛根，用此者，用其涼散，…，凡解散之藥多辛熱，此独涼而甘，故解温熱時行疫疾

一方，明代の『本草蒙筌』⁷⁾に「秋後採根」と、五月以外の採集時期が初見され，現代では『中華人民共和国薬典 (1995)』²⁾に「秋冬二季採掘」，『中薬志』⁸⁾に「10月后至第二年4月前掘根」とある如く，葛根の採集時期が秋・冬期に変化した。

また日本では，本草学が盛んになった江戸時代の本草書に「五月」，「冬月」など，異なる採集時期の記載が見られ (表2)，現在は中国と同様，冬期に採集されている。

一方，葛粉すなわちクズデンプンを精製し食用とする葛根の採集時期に関しては，宋代の『本草衍義』⁹⁾に「冬月取生葛以水中揉出粉…」と冬期に採集されていたことが明記され，また明代の『本草品彙精要』¹⁰⁾の葛粉の條にも「冬月取根」とあり，古来冬期に採集されてきた (表1)。我国でも葛粉製造のための葛根の採集時期は一貫して晩秋～初春である。

2. 性味の変遷について

葛根の性味に関しては，『神農本草経』¹¹⁾に「味甘平」とある。この性味に変化の兆しが見られるのは金・元時代で，李杲の『珍珠囊』¹²⁾の中に「葛根味甘・平，性寒」とある。

一方，葛粉に関しては『開宝本草』¹³⁾で別條をたてて「葛粉味甘大寒」と初見され，明らかに葛根とは別薬物として扱われ，性味に違いがみられる (表1)。すなわち，冬期採集の食用葛根の性質は大寒とされていたことが知られる。陰陽理論を考慮すると，夏に採集したものは陽気を帯びて熱性を持ち，冬に採取したものは陰気を帯びて寒性を持つと考えられる。すなわち，葛根の場合，夏に採取した葛根は性平，冬に採取した葛粉は性大寒とされることは，陰陽の理論に合致する。

また明代になると，『本草蒙筌』⁶⁾に採集時期について「秋後採根」と記され，性味は「味甘，氣平寒」とされ，また現代の『中華人民共和国薬典』²⁾では「秋冬二季採掘」，性味は「甘辛涼」とされ，これらの書物では採集時期の変化のみならず，冬期に採集された葛根について性味の寒・涼側への変化がみられる。また同じ明代の『本草彙言』¹⁴⁾や『本草正』¹⁵⁾では，葛根は「寒 (或いは涼) の性質で熱を退け，病を治す」ことが記され，古代とは葛根の薬効や性味の判断基準が明らかに変化している (表3)。

一方，古来の薬効「性平」を踏襲したものとして，清代の『本草求真』¹⁶⁾には「胃が寒に被われ，

表4 葛根の性「平」の薬理に関する記載 (抜粋)

書名	時代	記載内容
本草求真 ¹⁶⁾	明	胃被寒蔽，而氣不得上升入肺則渴，胃主肌肉，氣不宜通則熱，故當用此以治，俾其氣升津生，肌解熱退
和語本草綱目 ¹⁷⁾	江戸-1698	或人問フ葛根，本經ニ平トス。然レドモ此レガ表ヲ発シ汗ヲ出シ胃ノ氣ヲ上行セシムル者ハ，陽トシ，温トスベシ。又渴ヲ止メ酒毒ヲ解キ狂ヲ治スル者ハ涼ノ如シ。吾子其レ何如。曰，其ノ性温ニ似テ温ナラズ涼ニ似テ涼ナラズ。故ニ平ト云。然レドモ微温ニ近キ者トスベシ。此レガ胃熱ヲ除キテ渴ヲ止メ酒毒ヲ解キ狂ヲ治スルモ皆ナ甘辛微温ヲ以テ，陽明結鬱ノ熱ヲ解クガ故也。案ズルニ葛根ノ熱ヲ治スル者ハ熱ヲ涼スニアラズ，結熱ヲ解ク者ナリ，涼劑トスルトキハ表ヲ発シ汗ヲ出スノ功。何レヨリ此ヲ致サン。深く考察スベシ

気が上昇できずに肺に入れば渴し，胃は筋肉を主するため，気がうまく通らなければ熱を持つ。これらの症状は葛根を用いることによって治す」と記され，葛根の効能は「気を上昇させ，津液を生じ，熱を退ける」と記されている (表4)。

同様に，我が国でも江戸時代，岡本一抱¹⁷⁾は葛根の「性平」に関して，「葛根は性質が温に似て温ではなく，涼に似て涼ではないから平なのだ」とし，葛根が熱の病を治するのは「熱を冷ますのではなく，結熱を解くためである」と考察している (表4)。

なお，我が国では，葛根の性味はほとんど全ての本草書で「甘辛平」と記されている。「甘辛平」の性味は明代の『本草綱目』¹⁸⁾に初見され，江戸時代の本草書のほとんどは『本草綱目』を引用していることから，性味に関しても同書を引用したものと考察される。

3. 採集時期が変化した時期

薬用葛根の採集時期が変化した時期については，性味に変化が生じた金・元から明代頃であろうと考察する。

明代の本草の流れをくむ日本の江戸時代の本草書には，採集時期を「五月」とするものと，「冬月」とするものが見られる (表2)。「五月」と記載する書物は江戸時代初期のもので，これは単に中国の古代本草書を引用したものと判断される。一方，後の『大和本草』¹⁹⁾や『古方薬品考』²⁰⁾には「冬月あるいは春」に採集されると記載され，江

戸時代中期頃にはすでに冬から初春に採集されていたものと考察される。当時，中国の影響を強く受けていた我が国で冬期に採集されていたことから，中国においては明代には確実に採集時期が変化していたと検証しうる。

4. 採集時期が変化した理由

葛根について，陶弘景⁵⁾ (500頃) は「人皆蒸食之」と記載しており，古くから葛根は食糧としても重要な役割を担っていたと判断される。しかし，同時に「南康廬陵間最勝多肉而少筋甘美但為薬用之不及此間爾」と，食糧として甘美なものは薬用としては効果が劣ると認識されていたことが窺える。なお，この一文に関しては李時珍¹⁸⁾も「〔弘景曰〕…南康，廬陵間最勝，多肉而少筋，甘美，但為薬不及耳」と多少文章を変更して引用し同様のことを述べており，古来薬用種と食用種が区別されてきたことが窺えるが，あえてこうした記事が掲載されたのは，両者の混用があったためではないかと考える。

一方，前述のごとく李杲¹²⁾は「葛根味甘・平，性寒」と記し，さらに『薬性賦』¹²⁾の中では「寒剂」の一薬物とするなど，金・元の薬理論において葛根の性味の解釈に変化が生じている。これは明らかに冬期採集の葛根の性味を記したもので，当時冬期採集品の葛根が使用されていたことを示すとともに，以後その使用を容認するきっかけになったものと考えられる。

なお我が国においても，江戸時代の『庖厨備用

表5 葛根が食糧として重宝されたことが窺える記載 (抜粋)

書 名	時代	記 載 内 容
庖厨備用倭名本草 ²¹⁾	1671	葛根ハ春時麦未タ熟セサルノ間タノ民家ノ糧ナリ…春白荒俟ヲ救フ飯料ナリ
菜譜 ²⁹⁾	1704	冬春掘り起こしてたたき汁を水飛して葛粉として饅餌とし飢を助くは民用に利あり味亦よし
大和本草 ¹⁹⁾	1709	凡凶年ニハ貧民春初ヨリ山中ニ入日葛藤ノ根ヲホリテタタキ其汁ヲトリ粉トシ饅トシテ食ヒ飢ヲ助ク遠村ノ民ハ妻子家人ヲ盡ク携テ山ニ入り廬舎ヲ作り居ル苗生シ粉ナキ時山ヲ出ツ其人救コト五穀ニツゲリ葛藤ノ山野ニ多ク生スルハ天地ノ民ヲメクミ玉フ自然ノ理ナリ

倭名本草²¹⁾ (1671) や『大和本草¹⁹⁾ (1709) などでは、葛根が冬期から春期 (麦未だ熟せざるの間) にかけての民家の重要な食糧とされたことが記され (表5), 葛根は食糧の少ない冬期の重要な食糧源であったと判断される。また、多数の本草書に葛粉精製用のクズは冬期に採取されたことが明記され、『大和本草¹⁹⁾』には「苗生シ粉ナキ時山ヲ出ツ」と記され (表5), 苗の生じる前, すなわち冬期に採集したものは粉 (デンプン) が多く, 食用としての品質が高かったことが窺える。

結論及び考察

1. 薬用葛根の採集時期は, 中国では古来「五月」或いは「五月五日」とされていたが, 金・元～明代頃には冬期に変化し, 現在に至っていることが明らかになった。

2. 採集時期が初夏から冬期へと変化した理由については, i) 葛根が食糧の少ない冬期の重要な食糧源であった, すなわち葛根は薬用よりも食用の方が量的に圧倒していた, ii) 薬用葛根と食用葛根の混同・混用が日常的に行われていた, iii), 旧暦五月頃の農繁期よりも秋後の農閑期に採取するほうが都合が良かった, iv) 草木が繁茂し害虫が多い初夏よりも, 多くの草木地上部が枯れ虫が少ない冬期の方が山に入って採集しやすい, v) デンプンの精製には発酵しにくい厳冬期が適している, ことなどの背景が複合的に影響したものと考察する。加えて, 金・元時代に, 古来「平」とされてきた葛根の薬性を冬期採集品の薬性である「寒 (あるいは涼)」と記載し, 薬理論的にも葛根の薬能の解釈を変化させたことで冬期

採集品の使用が容認され, このことをきっかけに以後採集時期が完全に入れ代わったものと考察する。

なお, 冬期採集の葛根の薬性を「寒」あるいは「大寒」として初夏に採集したものと区別して用いはじめたことも考えられるが, 両者を使い分けたとする記録は見られない。

3. 現在繁用される「葛根湯」や「桂枝加葛根湯」は古く『傷寒論²²⁾』に記載された処方であり, これらは旧暦「五月」に採取した性「平」の葛根の薬効を期待したものであることから, 本草学的には, 葛根は陽気に満ちた初夏に採取したものを使用すべきであると結論する。

引用文献及び注

- 1) 日本薬学会第119年会にて発表した一部。講演要旨集2, 164 (1999年, 徳島)
- 2) 中華人民共和国衛生部薬典委員会編, 「中華人民共和国薬典」, 1995年版, 一部, 296, 広東科学技術出版社, 広州 (1995)
- 3) 日本薬局方解説書編集委員会編, 「第十三改正日本薬局方解説書」, D194-197, 廣川書店, 東京 (1996)
- 4) 江蘇新医学院編, 「中薬大辞典」, 下冊, 2307-2310, 上海科学技術出版社, 上海 (1977)
- 5) 陶弘景校注, 小嶋尚真, 森立之ら重輯, 岡西為人訂補・解題, 「神農本草經集注」, 61, 横田書店, 大阪 (1972)
- 6) 岡西為人, 「本草概説」, 281, 創元社, 大阪 (1983)
- 7) 陳嘉謨著, 王淑民等點校, 「本草蒙筌」, 106,

- 人民衛生出版社, 北京 (1988)
- 8) 中国医学科学院薬物研究所等編著, 「中薬志」, 第1冊, 563-568, 人民衛生出版社, 北京 (1979)
 - 9) 寇宗奭, 1116, 「本草衍義」, 卷九, 1-2丁, 広文書局, 台北 (1981)
 - 10) 劉文泰ら編, 「本草品彙精要」, 卷十, 1-2丁, 商務印書館, 上海 (1936)
 - 11) 森立之, 「神農本草經, 神農本草經攷異」, 嘉永七年版影印本, 卷中, 5丁, 有明書房, 東京 (1980)
 - 12) 李杲編輯, 鄭金生, 張同君校点, 「珍珠囊薬性賦」, 金元四大家医学全書, 上, 885, 894, 天津科学技術出版社, 天津 (1996)
 - 13) 唐慎微撰, 艾晟校定, 「經史證類大観本草」, 208-209, 廣川書店, 東京 (1970)
 - 14) 倪朱謨, 「本草彙言」: 江蘇新医学院編, 「中薬大辞典」, 2309-2310, 上海科学技術出版社, 上海 (1977)
 - 15) 張介賓撰, 「本草正」, 歴代本草精華叢書, 二, 49丁, 上海中医薬大学出版社, 上海 (1992)
 - 16) 黄宮繡, 「本草求真」, 99, 宏業書局, 台北 (1990)
 - 17) 岡本一抱, 「和語本草綱目」, 上, 473-477, 春陽堂, 東京 (1975)
 - 18) 李時珍, 「本草綱目」, 校点本, 第二冊, 1276-1280, 人民衛生出版社, 北京 (1977)
 - 19) 貝原益軒著, 白井光太郎考註, 「大和本草」, 第一冊, 220-222, 有明書房, 東京 (1978)
 - 20) 内藤焦園, 「古方薬品考」, 33-37, 燎原, 東京 (1974)
 - 21) 向井元升著, 難波恒雄編, 「庖厨備用倭名本草」, 126-127, 漢方文献刊行会, 大阪 (1978)
 - 22) 張仲景著, 石原明解題, 「傷寒論」, 葛根湯: 80-81, 桂枝加葛根湯: 108-109, 明刊趙開美本影印, 燎原, 東京 (1973)
 - 23) 李中立, 「本草原始」, 卷二, 草部中, 1-2丁, 信元堂梓行 (1844)
 - 24) 徐光啓, 「農政全書」, 三, 1834-1836, 新文豊出版, 台北 (1975)
 - 25) 盧之頤纂參, 冷方南, 王齊南校點, 「本草乘雅半偈」, 207-209, 人民衛生出版社, 北京 (1986)
 - 26) 曲直瀬道三原著, 栗島行春註, 「新編靈宝薬性能毒」, 53-56, 土と文化社, 長野 (1975)
 - 27) 下津元知, 「図解本草」, 62-63, 大阪漢方医学研究所, 大阪 (1981)
 - 28) 人見必大, 1697, 島田勇雄訳注, 「本朝食鑑」, 1, 209-210, 平凡社, 東京 (1978)
 - 29) 貝原益軒著, 「菜譜」, 益軒全集, 卷之一, 252, 益軒会, 東京 (1910)
 - 30) 寺島良安, 1713, 「和漢三才図会」, 下, 1376, 東京美術, 東京 (1970)
 - 31) 李杲, 「薬類法象」, 金元四大家医学全書, 上, 849, 天津科学技術出版社, 天津 (1996)
 - 32) 李杲, 「用薬心法」, 金元四大家医学全書, 上, 868, 天津科学技術出版社, 天津 (1996)
 - 33) 王好古著, 崔掃塵, 尤榮輯點校, 「湯液本草」, 61-62, 人民衛生出版社, 北京 (1987)
 - 34) 朱櫛撰, 「救荒本草」, 1525刊本版, 第4冊, 70-71丁, 中華書局, 上海 (1959)
 - 35) 蘭茂著, 滇南本草整理組編, 「滇南本草」, 第二卷, 212-216, 云南出版社, 昆明 (1977)
 - 36) 蔣介繁, 「本草擇要綱目」, 珍本医書集成, 第2冊, 2, 上海科学技術出版社, 上海 (1985)
 - 37) 汪訥庵, 「本草備要」, 25, 香港医林書局, 香港, 発行年不明
 - 38) 朱東樵著, 秦之濟校, 「本草詩箋」, 94, 旋風出版社, 台北 (1974)
 - 39) 呉儀洛, 「本草從新」, 98, 杏林書院, ソウル特別市 (1972)
 - 40) 嚴西亭, 施澹寧, 洪緝菴同纂, 「得配本草」, 105, 上海科学技術出版社, 上海 (1994)

要旨 マメ科のクズの根に由来する漢薬“葛根”は、昨今は日・中共に冬期に採集されている。しかし、中国古代の本草書には採集時期は旧暦5月すなわち初夏であると記されている。本草学的研究の結果、葛根の採集時期は元あるいは明代に変化し、主な原因は冬に採集される食用葛根との混乱であったと考察した。『傷寒論』や『金匱要略』のごとき古代の医方書に記された処方には初夏に採集した葛根を調剤すべきである。

キーワード：葛根，クズ，採集時期，初夏，本草学，中国薬物